

## 日本語版への序文

本書は、哲学・経済学・政治学を学ぶ学部専門課程および大学院の学生を主な対象とした平等主義的価値理論に関する概説書である。分析哲学の手法にもとづいて、抽象的な道德哲学の問題を論理的かつ明瞭に説明するよう心がけた。本書を読むにあたっては、分析哲学に関する予備知識は必要ない。論理的に思考することのみが求められている。

本書が日本語に翻訳され、日本の読者に読まれることを私は強く望んでいた。なぜなら、日本では近年、福利厚生に格差が拡大しており、これからも拡大し続けることが確実だからである。特に正規雇用と非正規雇用の労働者の間の格差は深刻であり、正規雇用と非正規雇用では、生涯賃金に格差が生じることが予測される。生涯賃金の格差が福利の他の領域の不平等に及ぼす影響も強く懸念される。つまり、生涯賃金及び福利厚生の不平等は、健康状態の格差、生存年数の格差、子供を持つ機会の格差、子供の教育の格差、そして究極的には生きることへの希望の格差へと影響を与えるだろう。このように、日本では格差の問題がこれまでになく重要になってきているのだが、平等を希求する道德的原理とは何かという議論はあまり活発に行われていない。本書では、平等に関する道德理論すべてを論じることはできなかったが、福利の平等を希求するとは道德的にどういうことなのかという根本的な議論を活発にする契機になれば幸いである。

英語版原著は全7章で構成されていたが、日本語版では第6章を割愛することにした。英語版原著の第6章では主に二つのトピックが論じられている。第一のトピックは厚生分配評価の時間的単位である。福利の分配を評価する際、ある特定の期間についてそれ以外の期間とは無関係に（例えば2016年を）評価

## 日本語版への序文

すべき（時間断片説）だろうか、それとも生涯全体にわたる福利の分配を評価すべき（生涯全体説）だろうか？ 割愛した第6章では、後者には道徳的正当性があるが、前者には十分な道徳正当性がないと論じた。第二のトピックは、人口規模に関する倫理理論に関わっている。人口の規模が道徳的変数とされた時、福利配分の評価の仕方に変化が現れるだろうか？ この問題は現代道徳哲学における理論的難問の一つなのだが、人口規模の道徳理論自体が極度に抽象的であり、また日本であまり紹介されていないため、割愛することにした。

最後になるが、日本語訳を短期間に、そして正確に翻訳してくださった齊藤拓先生にお礼と感謝を申し上げたい。彼は日本ではあまり議論されてこなかった分析的道徳哲学の平等主義理論を熟知する数少ない研究者である。齊藤先生の研究成果とともに、本書が分野の違いに関わりなく広い読者層に届くことを祈っている。

2016年3月モントリオールにて

広瀬 巖

## まえがき

本書では、現代の道徳哲学および政治哲学における、広い意味で平等主義的な分配的正義に関する諸理論の主要な考え方のいくつかを説明する。平等主義に関する文献はあまりに膨大なので、そのすべての側面を取り上げることはできない。いくつもの重要な側面のうち、本書では、平等主義的分配原理の持つ評価に関する側面に焦点を当てる。評価に関する側面という語で私が言わんとしているのは、諸々の事態の相対的な善さないし順序付けに関する研究である。つまり、フェミニズム、民主的平等論、グローバル正義、福利という概念それぞれ、福利の個人間比較など、平等主義における他の重要な諸側面については論じない。それゆえ私は、本書が分配的正義という分野全体についての完全な参考書ではないことをよく認識している。

本書は主として哲学および政治理論を学ぶ学部上級生および大学院生のためのテキストとして構想されているが、より広い読者に読んでもらうことも目指している。規範倫理学や政治哲学の初歩的な知識と分析スキルが前提とされているが、経済学や政治学、社会学、公共政策、公衆衛生、医学、その他、人間の福利の分配に関心を向けるあらゆる領域の学生がアクセスできるレベルの説明になっている。

分配的正義は哲学の一分野であるのみならず、別の学術領域の一分野でもある。例えば、経済学の形式的分析は、平等主義的な分配的正義論の構造を理解するうえで極めて重要かつ有益であるが、少なからぬ人々がそれに尻込みする。私が思うに、分配的正義の諸理論を説明する最も効果的な方法は、経済学と政治理論の成果を哲学的分析へと統合することである。そのため、そうした成果のいくつかを形式的でないかたちで組み込むことにした。近年では多くの大学

まえがき

が、哲学、政治学、経済学を統合した学部プログラム（PPEプログラム）を提供するようになってきているが、本書はそのようなプログラムにおける講義としてとくにふさわしいはずである。

現代平等主義に関する文献は、膨大で、専門的で、錯綜していて、複雑である。そのために、平等主義的な分配的正義の本格的な理論分析に深入りすることを尻込みする学生もいる。それでも、平等主義は道徳哲学および政治哲学の中心的論点の一つであり続けてきたし、これからも間違いなくそうあり続けるはずなのであり、哲学内外の多くの学生は平等主義を理解することに関心を示すことだろう——その目的が、平等主義を支持するためであれ、実践的な諸問題に適用するためであれ。本書ではこのギャップを架橋することを目指して、過去約40年間の平等主義に関する文献を概観しつつ批判的に分析する。

私が本書で行った最大のチャレンジは、健康およびヘルスケアにおける分配的正義についての章を設けたことである。学生たちはしばしば、たとえ分配的正義の諸理論を実によく理解していたとしても、抽象的な哲学的分析を実践的文脈のなかで明確に示すことの難しさに気付く。平等主義がいかにして実践的な価値を持ち実践に用いられうるのかを示すために、健康およびヘルスケアという文脈を選んだ。健康およびヘルスケアの分配という論点の一つの独立した研究分野としてすでに確立している。グレッグ・ボグナーと私はラウトレッジ社から『ヘルスケアの割当てに関する倫理学』という本を出版する予定であり、健康およびヘルスケアの分配から生じる倫理的諸問題についてのより進んだ研究に興味があるなら、これを読むことを薦めたい。とはいえ、平等主義的な正義論は他の多くの分野に適用可能である。本書を読んだのち、読者が理論と実践の両面における平等主義のさらなる探究へと踏み出してくれることを望んでいる。